〔書評〕

二戸麻砂彦著

『節用文字の音注研究』

佐々木 勇

一、本書の構成

二戸麻砂彦著『節用文字の音注研究』の章立ては、左のとおりである。

【序論】節用文字の概要と音注

0-1 本書の目的と構成 0-2 節用文字の概要 0-3 掲出語の錯

綜 0-4 節用文字に付載された音注

【本論／第1篇】節用文字の反切と同音字注

1-1 はじめに 1-2 節用文字の反切と切韻系韻書 1-3 節用文

字の反切と玉篇 1-4 節用文字の反切と類聚名義抄 1-5 節用文

字の同音字注 1-6 まとめ

【本論／第2篇】節用文字の仮名反切

2-1 はじめに 2-2 節用文字の仮名反切一覧 2-3 仮名反切の

位置／標準形式 2-4 仮名反切の位置／変則形式 2-5 まとめ

【本論／第3篇】節用文字の仮名音注

3-0 はじめに 3-1 節用文字付載の仮名音注 3-2 仮名音注の

韻母別考察 3-3 I 韻類 3-4 II 韻類 3-5 IV 韻類 3-6 III B 韻

類 3-7 III A 韻類 3-8 仮名音注の声母別考察 3-9 仮名音注と

仮名反切の機能分担 3-10 まとめ

あとがき・索引

実に整然とした章立てである。

本書の研究対象『節用文字』に関する著者の既発表論文は、【引用文献・参考文献一覧】に引かれる左のものである。

①「節用文字の反切」(『山梨県立大学国際政策学部紀要』第6号、二

〇一一年三月)。

②「節用文字の仮名反切」(『山梨県立大学国際政策学部紀要』第7号、

二〇一二年三月)。

③「節用文字の同音字注」(『國學院雑誌』114巻6号、二〇一三年六

月)。

④「節用文字の仮名音注」(『山梨県立大学国際政策学部紀要』第9号、

二〇一四年三月)。

章立てと対比して知られるとおり、右既発表論文は、本書の本

論第1篇から第3篇の題目に当たる。また、①論文・③論文には、本書序論「0.2 節用文字の概要」「0.3 掲出語の錯綜」に相当する「節用文字の組成概要」「掲出語の錯綜」(①論文)、「節用文字の概要と組成」「掲出語の錯綜と混乱」(③論文)の項が有り、②論文には序論「0.4 節用文字に付載された音注」相当の「節用文字付載の音注」が存する。これらは、既発表論文の表現をわかりやすくした変更、用例引用を正確にした変更、用例の追加と削除の外、ほとんど修正されていない。論文発表時での完成度の高さが知られる。

右以外の変更点は、次の二点である。

●本書では、「右傍」「右注」など、注の書写位置を記している。

ただし、「右傍」「右注」等の注が【序論】中の用例にも追加されたにもかかわらず、本書に「凡例」が無いため、「右傍」と「右注」との差は、【本論／第1篇】までわからない。

●④論文では省略された全用例が掲げられ、分析が加えられている。

本書が対象とする音注の大部分を占める「仮名音注」は、例の多さ故、単独の論文で全例の分析結果を示すことは困難である。本書では、「38 仮名音注の声母別考察」も追加され、全容の詳細な分析がなされている。なお、④論文で ρ とされていたI韻類沃韻が、著書126頁の表では ρ に入っているのは、著書の誤りであろう。

二、本書の内容について

以下、本書の順に従い、内容に關することがらを述べる。

【序論】節用文字の概要と音注

冒頭「0.1 本書の目的と構成」に「本書は、節用文字が付載する各種の音注を集約して一覽となし、それに分析を加えて、その特徴を明らかにすることを目的とする。」と述べる。

しかし、その対象の音注に、和訓に対する音注(声調注)は入られていない。用例の和訓に声点が付点されている場合も、声点を表示することは省略されている。本書は、節用文字の漢字音注研究である。

「0.4 節用文字に付載された音注」8頁で「字類抄諸本の編纂過程は概ね次の二段階を想定できる。」とし、「A いわゆる「色葉和名」の基準に基づく和訓語彙の蒐集」「B 語彙数の増加と字音の付載」として、まず「和訓語彙」を集めるのが目的であった、と考えられている。10頁には、「増補改訂において、掲出語によつては音注の付載も進められたと考える。あくまで音注は補助的な役割を担ったのであろうが、すでに定着していた字音語や字音以外に読みのない語には音注が必要となった。」とある。右の想定では、「字音以外に読みのない語」は、第一段階Aでは採用されないもので、すべて第二段階Bにおける増補となる。初期段階では、字音語しかない「ル字」は存在しなかったことになり、「レ字」には被レリのみ、「ラ字」には等ラ・被(見・所)ラル・概

ラクハのみが掲げられていたことになる。そのような辞書は、当時の書記需要に応えられない。藤本灯『色葉字類抄』の研究』(勉誠出版、二〇一六年)は、『色葉字類抄』が「疊字部には、古記録等の実用的な文章を記す目的のための語というよりは、仏教説話等に用いられ、庶民にも通じる程度の難度の語が多く収録されている」「現代の国語辞書に似た性格を持つ」(終章第二節結論より抜粋)ことを明らかにした。色葉字類抄「原形本」とされる「川瀬一馬藏本」(古辞書叢刊複製本)にも字音語は存する。よって、字音語がすべて増補である、とは考えがたい。この点は、現「節用文字」の音注をいつの漢字音資料とすべきか、という基本的な問題に繋がる。

なお、注(04)に、本研究においては、「次の複製を参照した。
・原装影印版 古辞書叢刊『節用文字』(雄松堂書店、1967年)と有る。しかし、この複製本は、存在しない。『節用文字』(古典保存会、一九三三年)あるいはその再複製である『節用文字』(白帝社、一九六二年)の誤りである。

【本論／第1篇】節用文字の反切と同音字注

本篇では、初出論文に用例が追加されている。ただし、25頁第七例など、出典・所在・引用に、誤っているものがある。

『節用文字』の反切十五例は、切韻系韻書に十一例、玉篇に二例、周禮注に一例が一致し、一例は不明である。これらを引用する某書から引用した可能性も有る、とする結論は、既発表論文と同一

である。

節用文字の同音字注全五例「尺反・元反・鬼反・京反・生反」は、「留意を要する場合に付載する」とされる。「蹟」の「尺反」は、「シヤク」「セキ」両音ともに把握したいがための措置であろう。」としながら、他の同音字注は、「グワン・クキ・キヤウ・シヤウ」を示す、と解釈されている。

しかし、すべての同音字は、呉音で拗音形となる漢字に付されている。ここから、その拗音を「同音字」で示した、と考えるのが自然ではなからうか。

なお、この五例を「同音字注」と呼ぶことは、適切であろうか。中国および日本の古辞書・音義における同音字注は、「音〇」が一般的な形式である。『節用文字』の「尺反」等は、第2篇「仮名反切」の仮名相当部分が漢字で示されている、と見るべきではなからうか。この注音法は、拗音の「類音字表記」と言われてきた。^注中国中古音で同音である「同音字注」が全五例中に無いことから、再考すべきかと思われる。

【本論／第2篇】節用文字の仮名反切

「仮名反切」とは、「反」表示のある仮名音注(41頁)を指す本書の用語で、「樗・チヨ反」の類を言う。しかし、「仮名反切」の語は、国会図書館蔵宝暦三年写本『仮名反切秘伝』などの韻学書では、反切を仮名で音読して被注字の音を導く法の名称として用いられてきた。『節用文字』の「(仮名)反」は、掲出字の傍に

は原則として加^{注2}点されず、掲出字下の訓注等加^{注2}点位置に集中する。この事から、訓注と区別するために音注に「反」を付したものと考えられる。その、節用文字の「(仮色)反」を「仮名反切」と呼ぶのは、適切ではなからう。

本篇では、標準位置である「左注」に「仮名反切」が記されているか否かの、形式による分類整理に終始しており、音の分析は第3篇末に持ち越される。

【本論／第3篇】節用文字の仮名音注

『節用文字』における音注の中心が仮名音注であるため、本書の大半はこの第3篇が占めている。

〔3〕「節用文字付載の仮名音注」で、ヲ篇とヨ篇の音注が掲出され、「ヲ篇それ自体の掲出語数が多いという点を勘案しても、同篇は相対的に仮名反切（判別のため★を付した）が目立つ。それに対して、ヨ篇では圧倒的に仮名音注が施され、仮名反切は二例数えるのみである。これらは増補過程の一端を示していると想像できよう。」と記される。また、仮説C「仮名反切」は「増補改訂の早い段階において加えられた」、仮説D「仮名音注」は「後段の増補段階において付載された」と想定される。この仮説に立てば、ヲ篇はヨ篇に比して、早期増補の割合が高いことになる。それは、なぜであろうか。

この仮説とは異なり、底本に存した「仮名反切」の「反」を、ヨ篇の書写時には省略した、と考えることもできる。

〔3〕仮名音注の韻母別考察〕以下では、中国中古音の解説を加えつつ、三根谷徹の中国中古音推定に従い、観智院本『類聚名義抄』和音・承暦本『金光明最勝王経音義』音注等を引きながら、『節用文字』の仮名音注を整理・考察している。ただし、137頁表下五行目「和音「去」は和音「平」であり、同頁下から二行目の「類聚名義抄」和音「稲」に「平」「去」を記入しないなど、引用や用例所在の誤り、音注の落ちが全体に散見される。^{注3}

202頁に「撰」の仮名音注「カン」は *kan* *van* という音変化を反映した例である」とある。「撰」の「カン」は、「後世まで保持された」「カ行合口を示す日本語表記」（203頁）の異例である、との説である。しかし、これは、原本「セン」を訂正した上での解釈である。二巻本『色葉字類抄』前田家本では「撰セム」、大東急記念文庫蔵十巻本『伊呂波字類抄』でも「撰タイ」とされていて、当該掲出字は木偏の「撰（セン）」と解すべきである。

206頁「艦」の「マフ」は、原本で「マウ」であるため、「混同を反映した例」ではない。

251頁641b「從」は、原本仮名音注「シヨウ」であり、「異例」とはならない。

〔3〕仮名音注の声母別考察（314〜406頁）でも、三根谷説による中国中古音声母の推定音価との比較がなされる。

350頁「娘母」で、「絮ジヨ」「悞ジ」を「鼻音声母の非鼻音化

(denasalization) 現象を反映している。」とする。しかし、「絮」は、『広韻』「息據切」の心母音も存し、『節用文字』該当例はこの音の意である。また、「恹」の『節用文字』当該例には、「チ」の仮名音注が加添されている。続けて、「娘」の仮名音注「シヤウ」も同様である。」とされる例は、原本は「嬢」字であり、『広韻』「嬢」には「汝陽切」の音も存する。

356頁で「酢ソ」に対して、「あるいは「酢」の異体字「醋」の字音把握を反映した例とも推測できる」とある(韻母に関する156頁にも、同様の記述が存する)。確かに、『広韻』には「酢」に鐸韻の反切しか無い。しかし、『集韻』には、遇韻(去声)の音が収載されており、「酢ソ」はこの音である可能性が高い。

また、「節用文字」の仮名音注には清濁表示がなく、その分別はできない。」と各項で述べる。だが、掲出字には清濁を区別した声点加添されており、(雅意)カ(去濁)イ(平)(23ウ4)の例も存する。これらを本書に取り込んで頂きたかった。

「36 仮名音注と仮名反切の機能分担」では、「仮名反切」は「増補改訂の早い段階」に、仮名音注は「増補改訂の後段」に記入された、とする。これは、第1篇・第2編での「可能性」「想定」「推測」を言い換えたものである。

これが「機能分担」であろうか。反が付される仮名音注と反の無い仮名音注とに、いかなる機能の相違・分担があるのかを知りたい。

「3・10 まとめ」は、仮名音注についての分析のまとめである。左に引用する。

VI 仮名音注を示す七五例は、一定の編纂方針のもと、より多くの字音把握を目指す増補改訂が進んだ段階において加えられた可能性が高い。増補改訂の早期に付載された仮名反切とは異なる。

VII 仮名音注が目指す字音の把握は日本語に馴化した段階を示している。いわゆる呉音の特徴と漢音の特徴を区別する意識はない。中国語音を導入した段階では重層的であったが、やがて渾然と融合した馴化の状況を呈している。

この「まとめ」がVIからはじまるのは、前項「36 仮名音注と仮名反切の機能分担」で第1篇・第2篇のまとめをI〜Vとして行なっているためである。I〜Vでは、反切が初期の増補改訂段階で記入されたこととその出典、同音字注は「留意を要する場合に付載する」こと、そして前述のごとく、「仮名反切」が増補改訂の早い段階に、仮名音注が増補改訂の後段に記入されたことを述べる。

したがって、『節用文字』仮名音注の内容に関する「まとめ」は、「日本語に馴化した段階」であることと、「いわゆる呉音の特徴と漢音の特徴を区別する意識はない」ことの二点である。

一点目の『節用文字』仮名音注が日本語に馴化した段階であることは、国語辞典に記載された字音注であることから、首肯される。

しかし、『節用文字』には、本書中でも指摘されるとおり、「スキ」(16ウ1・17ウ4)「スキン」(29ウ2)「シキン」(55オ5)の音注が存する。本書で、「人為的な仮名音注の表示であるのか。」(296頁)、「人為的な表記かもしれない。」(300頁)と注されるように、これらは「日本語に馴化した」音とは言えず、反切を用いた規範的な文献に見られるものである。^{注4}「シキン」以外は漢字の右傍に加点されている点も、他の多くの仮名音注とは異なる。

『節用文字』は、当時常用の漢字音を主として記載する中に、右のような規範的な音をも含む辞書である点に注意が必要であろう。三巻本『色葉字類抄』も、同様である。

まとめの二点目「いわゆる呉音的特徴と漢音的特徴を区別する意識はない」に関して、「呉音的特徴であるか、漢音的特徴であるか、その判別をし得ない場合が多い」(160・161頁)に類する記述が、各韻類・音系の「基本的な表記」の項に見られる。これは、比較的多く引用・対比されている観智院本『類聚名義抄』が、反切による正音注と和音注とを明確に区別することと比較した上での記述か、と推測される。

しかし、本書の仮名音注についての記述では、『節用文字』に「いわゆる呉音的特徴と漢音的特徴を区別する意識はない」ことがわかりにくい。目的に合わせて並びを変え、本書に繰り返し引用される用例(表1〜表15)は、音注・和訓が書き込まれた位置を厳密に区別している。当該音注が「右注」「左注」「右傍」「左傍」のどこに有るのかを考慮した分析がなされれば、呉音・漢音を

「区別する意識はない」ことが、より説得的になるのではなからうか。

なお、『節用文字』の掲出字には、本書の用例にもおおよそ記される、一五〇余の声点が付点されている。仮名音注にも、声点加點例が存する。^{注5}加點数は多いとは言えないものの、国語辞書登載語の漢字声調を示した例として貴重である。この声点や、声調注「疽^ソ首去聲」(36ウ2)などについても、論じていたたたかった。

三、『節用文字』字音注の史的位位置づけ

本書各篇冒頭には、『節用文字』について、左のごとき解説が有る。

首尾を欠いた零帖ながら世俗字類抄や色葉字類抄の一諸本として、その複製が公刊された。鎌倉時代の書写かというが、いまだ詳細な分析がない。いわゆる字類抄諸本中の原撰本系諸本に関わるものであるかどうか、これも不明である。(この引用は序論一頁より)

では、本書によって整理・分析された漢字音注は、いつの字音資料となるのであろうか。この点について、著者の考えを記して欲しかった。

石川武美記念図書館(旧 お茶の水図書館)蔵『節用文字』は、綴葉装(胡蝶装)である。これは、山田孝雄「徳富猪一郎氏蔵節用文字 解説」(古典保存会『節用文字』一九三三年に所収)や川瀬一馬『増訂 古辞書の研究』(雄松堂出版、一九五五年)で、言

われている。山田は、次の如くに記す。

本書は縦八寸五分、横五寸三分、斐紙胡蝶装三折の本なり。

第一の折は右翼八葉、左翼十葉を算す。こは恐らくはもと十枚を二折にせしが、その上部の二葉が脱せしものならむ。第二の折は十枚を、第三の折は九枚をいづれも二折にしたるものなるが、今、上より二所、絲を以て綴ぢたれば、十分に開きがたし。

原本調査の機会を得て、右の記述内容を確認することができた。山田の言のとおり、第一折は巻頭から18ウまで、第二折は19オから37ウまで、第三折は38オから55ウまでである。第二折が十枚の折であれば、一葉足りない。37オウの一葉は、後から足したもののように見られた。すなわち、第二折は、九枚の折(36頁)に半折一葉(2頁)を加えた全38頁である。

川瀬一馬は、この第一折と第二折とが別筆であることを指摘した。原本でも、川瀬の指摘のとおり、18ウ以前と19オ以後は別筆であると判断された。

一例を除く反切の全例、「同音字注」の全例は、18ウ以前の第一折に存する。94例の「仮名反切」は、19オ〜55ウの第二折・第三折に14例しかなく、第一折に80例が集中する。第一折は、第二折・第三折に比して、圈点形式の声点の割合も高い。

これらの点を総合的に判断して、『節用文字』の音注全体を歴史的に位置づける必要がある。

四、むすび

本書は、国語古辞書における漢字音注全体の研究結果をまとめた初めての専書である。右に「こまこま」とした事のみを述べたのも、中国中古音の体系に基づく音注の整理・分析が、本書中に確実になされているからこそである。

本書では、『節用文字』の音注全体と、観智院本『類聚名義抄』・承暦本『最勝王経音義』・石山寺本『大般若経字抄』等および二卷本『世俗字類抄』・二卷本『色葉字類抄』・三卷本『色葉字類抄』の字類抄諸本の音注との対照もなされており、今後の辞書登載漢字音研究にとって、きわめて有益である。

「あとがき」に記される『色葉字類抄』『世俗字類抄』音注研究の続刊が待たれる。

注1 小林芳規「訓点における拗音表記の沿革」(『王朝文学』9、

一九六三年十月)、参照。

注2 存疑例「迄」(5オ6)と「容」(14ウ1)「娉」(26ウ4)「纂」(43オ4)が右傍例の全例である。

注3 引用注の解釈にも疑問が有る。たとえば、156頁「酢」について「ス」には「鄙語云」という説明が加えられている。とする(356頁も同様)。しかし、「鄙語云 カラサケ」であって、「鄙語云」は「ス」に対する注ではない。198・199頁「繞」は「鏡」の誤り、等である。

注4 佐々木勇『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』(汲古書院、

二〇〇九年）第三部第二章、参照。

注5 原本に声点が加点されていても、本書にその記載が無いことがある。これは、白帝社の複製本に依拠しているためと推測される。佐々木勇「古典複製本使用上の注意」（論叢『国語教育学』第十二号、二〇一六年七月）を参照願いたい。

注6 川瀬一馬『増訂 古辞書の研究』三二二・三三三頁。

本文は三人の寄合書になり、巻首より「カ字」辞字部の二行目まで、即ち現存本で巻首の十八葉までは頗る美事な筆蹟であつて、御物本傳行成筆和漢朗詠集の筆蹟に相似し、世尊寺流を完得した人の手になる事は一見明瞭である。恐らくは平安末期、二卷本色葉字類抄が編修せられた長寛元年から間もない頃に筆写せられたものと認められる。第九葉以下は遙かに筆蹟が劣り、更に兩筆を以て書き継がれてゐる。即ち、第十九葉より第四十二葉裏六行目第二字「強同アナカチ」まで一筆、同行第三字目「估ッヨシ馬」以下終末葉まで又別筆である。別筆の書継も同じ時に行はれたものである事は言ふまでもない。

しかし、川瀬は、後に見解を変える。
行成風の筆蹟を習得せし達筆漆黒の墨色にて書写せるも、巻末に至りて稍筆力鋭鋒を収めたる書き様となりて、第四十二葉裏六行三字以下は、門流の別筆かと思わるる程なれど、恐らく原本の書体によく倣い筆運びの適いたる部分と、次第に自己流の書き様に陥りたる書写相の相違なるべしと推せらる。（略）川瀬著「古辞書の研究」（三二二ページ）参照。（なお拙著には複製本に拠りて三筆寄合書と見たるは非なり。）

（川瀬一馬『新修成實堂文庫善本書目』一九九二年、100頁）

（二〇一五年一〇月一五日発行 汲古書院刊 A5判 四四八ページ 一三〇〇〇円＋税）

— 広島大学教授 —
（二〇一六年五月五日 受理）